

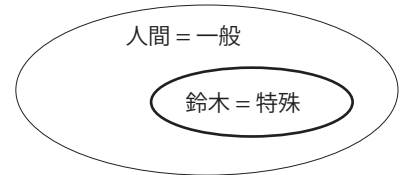
講読 memo

■ 「文化のモデルとしての言語 - 新しい言語観 (3)」 p.22

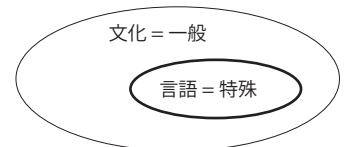
- ・ 「文化」=「人間によって生み出されたもの」(p.22) = ※ 人間による意味づけ・価値づけの営み
- ・ ※ 「『特殊』を『一般的』に含ませるのが、文の基本的構造で、
〔本来は〕それを逆にはできない(佐々木健一『論文ゼミナール』175頁)。

- ・ 主語 = 特殊、 述語・補語 = 一般

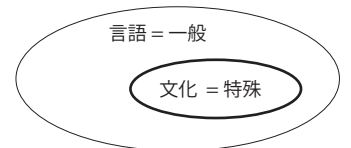
・ **鈴木 は 人間 である。** × 人間は鈴木である。
 (主語 = 特殊) (補語 = 一般)



- ・ だから、日常的な語法では、おそらく、「文化」を一般と捉えて、、、
○ 「言語は文化である」



- ・ 一方で、『文化は言語である』、、、このような見方は、つまり「言語」を、むしろ一般とする見方である。
言語は文化の一部でありながら、同時に文化の中でも特別に重要な地位をしめているということを認めることである
(p.22)。「言語に特別な強調がある表現」(p.22)。



■ 「絵画・映画・物語」 p.26

- ・ 「ポエティック」(仏 poétique, 英 poetics) : 「詩学」 = 「根源的には創造的の意」 p.26

- ・ ※ 「ポエム」(英 poem) 「詩」の語源
「ギリシャ語『ポイマ』 poema, poiema : 『作品、詩』(作られたものが原義)
ギリシャ語『ポイエイン』 poiein : 『作る、創造する』」
(下宮忠雄ら『スタンダード英語語源辞典』大修館書店、1989年、387頁)

- ・ 「ランゲージュ」(仏 langage) 言語活動全般のこと。言葉づかい、語法、伝達の仕方など(岩波哲学思想事典 p.1662)
- ・ 「ラング」(仏 langue) ある言語のもつ規則、文法、統辞法、その言語を習得した者が共有する言語体系全般。
- ・ 「パロール」(仏 parole) 話し言葉のこと。話者が「ラング」に基づいて実践する言語的実践。

- ・ クリスチャン・メッツ (Christian Metz, 1931-1993) フランスの映画理論家。記号学を映画批評に取り入れた。
主著『映画記号学の諸問題』、浅沼圭司訳、書肆風の薔薇、1987年

